
主人公はロクデナシ

アンデルセン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公はロクデナシ

【Nコード】

N3416BA

【作者名】

アンデルセン

【あらすじ】

世界初のVRMMORPG“Humans War”。世界共同開発により実現されたそれは、蓋を開けてみればまさかのデスゲーム。“限りなく現実に近い”世界でありながら、法も秩序も存在しない。あらゆる悪徳が許されたゲームの中で、百万人に及ぶテストーは無事生還できるのか？

プロローグ（前書き）

ファンタジーにするべきかSFにするべきか悩みどころ。

とりあえず、タグに含まれる内容及び、場合によっては十八禁ギリギリの微性的描写、残酷な表現や流血表現が出ます。

頭悪い内容になる確率大なので、お読みの際はご注意ください。

なお、この小説はフィクションであり、現実とはなんら関係性を持ちません。

ではでは、少しでもお楽しみいただければ幸いです……

プロローグ

銀色の閃光が二回、続けざまに斜めの軌跡を描く。

二振りの短剣による高速の蓮撃は目の前の木偶のエネルギー供給ライン、即ち生命線ライフラインを数本まとめて切断。

そこに長身瘦躯の男が手に持った体格に似合わない、無骨で禍々しい銀色の鉄塊を横薙ぎに振るう。

ライフラインからのエネルギー供給が絶たれた機械の木偶に、その破壊の一撃を避ける事は不可能。

易々と下半身に存在する四本の多脚步行部を叩き折り、慣性のまま再度振り下ろした二度目の一撃が兜割の線をなぞる。

バギャツ！ と、鈍い金属音が響き頭部を破壊、モノアイを吹き飛ばし、同時にオイルが噴出した。

数秒と経たず光の粒子となり果て消えていく哨戒型戦闘機械、シーカー〇七型。

「兄様」

「分かつてる。今日は女神が微笑んでるらしい」

と言っても、この世界に神なんていないがな。

そう口内で吐き捨て、兄と呼ばれた男が先程戦闘し破壊した機械。その消滅して消えた場所に落ちている、サイコロ状の結晶体を拾い、横に転がる十七インチ程度の木製の宝箱に触れる。

「中身はクズばかりですね」

「まっ、最低ランクのコモン級宝箱だったしな」

男を兄様にいさまと呼んだ少女が姫カットで切りそろえられ、腰まで伸ばされた艶やかな髪を撫でつけながら、ドロップ覧に記されたアイテ

ムを見て溜息を吐く。

「でも兄様、キューブは結構上質そうですし、今日集めた分を合わせれば、結構な額になるのではないのでしょうか？」

「そうだな。今落としたキューブ、パツと見てレア級ってところか。アンコモン級も幾つか今日は手に入ったし、これならそこそこになるかもな」

兄様と呼ぶ少女が男の首までしかない身長を嬉しそうに揺らし、凜と響く鈴のような声で口にすれば、男もそれに同意する。

キューブ。それは魔物を倒すと中確率で落とす六面体の結晶であり、エネルギー源としては元より、幅広い用途を持つ資源だ。

二人の見解通り、宝箱の中身は鉄くずなどばかりだが、レア級やアンコモン級のキューブであれば相場の変動にもよるが悪くない値段で取引されるだろう。

「これなら晩御飯は少し豪勢でも……」

途中で尻すばみに消えていく言葉。この世界では圧倒的に食料が少なく、他の物資に比べてそれらは高価である。

食べ物より武器の安い世界　とまでは行かなくとも、それに近いものがある中、“現実世界”のような不自由ない食生活は非常に困難だ。

まして、命の危険が常に付き纏う中、値段と必要性の結果、食事はどうしても後回しにされやすい。

豪華な食事と言うのが、どれだけ贅沢なのかを思い出した少女が口を紡ぐのは当然だった。

「あっ、兄様。東、およそ八十メートルにプレイヤー反応一です」「レベルは？」

「……私達よりは低いみたいです」

パッシブ型の索敵スキルの効果では、相手のレベルが上か下かしか分からない。

「おーけー。俺が先行するとバレル可能性もある、先に偵察を頼む。大体の戦闘スタイル、それに実力とかめぼしが付けば最高だな」

「そうですね。では、行つて参ります」

そうして皮製のドレスを指先で摘み、優雅に一礼をして素早く瓦礫の山を音もなく進んでいく。

「狩りは二日ぶりか？ 上手くいけば今日は本当に豪華な食事が出るぞうだな……」

ハント。一部のプレイヤーキラーの間で広まっているPKの別称。PKに成功すれば、相手は装備を必ず一つ以上ランダムで落とす。

更にインベントリと呼ばれる、道具袋のアイテムも必ず複数ドロップする。

普通のMMOであればあり得ない程の凶悪なシステム。無論、それには理由があるのだが……

「兄様、戻りました」

のんびりと妹の帰りを待っていれば、数分と経たず瓦礫の山にそぐわぬ端正な顔が姿を見せた。

ぼんぼんと、ほこりの付いた部分を手で払い、ハントに必要な情報を報告し始める。

「相手は索敵通り一人。戦闘スタイルは片手剣と小型の盾、全身鎧

を使った騎士タイプの男性。丁度シーカーと戦闘中でしたけど、このあたりのフィールドは初なのでしょうか？ 一人とはいえ、随分手間取ってました」

「リバイフポイント保険のLPは残ってるし……行けるな」

「では？」

「ああ、飛んで火にいるなんとやらだ。一人で行動するなんて余程の馬鹿か、それとも実力に自身があるのか……とにかく、世の中には怖い山賊も居るんだって教えてやらんな」

そう言って妹と同じ短い短髪をガシガシと掻き凶悪な笑みを浮かべた

シーカーを撃破した瞬間を狙い、先制に放たれた投擲用ナイフ、ダークが二本気の緩んだ隙を見事に突き、接合部及び利き腕に突き刺さった。

「だ、誰だッ!？」

それに答えず、代わりに瓦礫の山から流星のように躍り出た少女の流れるような蓮撃が、明確な意図と共に応える。

足場の悪さをものともせず潜り込むように接近。死を誘う銀色の狂気が踊る。

「お、おいっおいッ!？ まさかPKか!？ クソッ! ここは人が少ないって聞いて高い金払ったんだぞ! ふざけるなクソッ!！」

痛みと混乱に喚き散らしながらも、素早く刺さったダークを抜き、

歯を食いしばりながらバックラーとブロードソードで短剣をいなす。流石は全身甲冑と言ったところか、継ぎ目などの一部以外では掠る程度では傷すら負わない。

「馬鹿かお前？ ムフ・ポイント 座標地点を買っなんて、初心者でもやらねえぞ。んなの騙されたに決まってるじゃねーか」

「ん、ガッ!？」

少女に気を取られている間に横合いから両手剣、特注のツーハンドソードがその脇に叩き込まれる。

通常より幅広であり、重量も三キロ強に及ぶ鉄塊と遠心力により男が吹き飛び、更に追撃の一撃が踏み込みと共に頭部のヘルメットを粉碎。

「あああああああ、あ、あ、あ、ッ!？」

破碎した兜の破片が眼球に突き刺さり、百パーセントのフィードバック率が限らないリアルな痛みを脳内に叩き込む。

のたうち悲鳴を上げる男に静かに少女が忍び寄るより早く、構えなおされたツーハンドソードが勢いよく振り下ろされた。

悲鳴を上げる暇もなく切断される胴体と首、真っ赤な血が辺りに飛び散り、ドスンと倒れた胴体を中心に小さな水溜りを作り出す。

血臭が少女と男に届き、その顔が僅かに歪むが罪悪感に苛まれた様子は無い。

既にこの行為は、片手で数えるには多すぎるくらいにはおこなってきた。少女はともかく、元より頭のネジが確実に数本飛んでいる自覚のある男なら、尚更罪悪感を感じることもない。

《おめでとう御座います、レベルが上昇しました》

「おつ、やっぱりプレイヤーは入る経験値が桁違いだな。そろそろだとは思ってたが、あっさりレベルが上がりやがった」

脳内に直接女性型合成音声が響き、レベルUPを知らせる。ステータスウィンドウを表示させれば、各ステータスに割り振れるポイントが六ポイント増えている。

レベル毎に貰えるSPは四〜六のランダムであり、今回は非常に運がいいと言えた。

レベルの上昇が厳しいこの世界では一のステータス差ですら、確実に実感できる差となるのだから。

「兄様、どうやらこの人LPを持ってなかったみたいですよ」
「はっ？」

んな阿呆なと死体を見れば、確かに普通なら粒子となり消える筈の死体が残っている。

それは即ち、死亡時にホームで蘇生するのに必要なりバイバルポイント　ストックは二つまで　LPを保持していなかった証拠であり、また

「と言うことはデットか。LPなしで狩りに出るとか馬鹿にも程があるぞ……」

と言うことだった。

なんせ、この世界での死は現実の死を意味する。明確にそう示唆された訳ではないが、それはこの世界では暗黙のルールとして容認されていた。

「ああ、だからやたら経験値が多いのか」

「ドロップも装備品全部にインベントリの半分、間違いありません」

LPの無いプレイヤーは通常のPKより更に多い経験値に加えて、装備の全てとインベントリの半分に及ぶドロップが固定化する。死人にアイテムは必要ないといったところだろうか。

「さつて、そろそろ日が暮れるな。夜になれば凶悪な魔物も出るし、拠点ホームに戻るとするか」

「あ、あの兄様……その……」

冷静を売りにしている妹が珍しくもじもじと言いよどむ。はてと首をかしげ、ああそう言えばと頷き思い出す。

「ん？ ああ……そつか、先ずは“王国”キングダムにいかねーとな。上手い食料を買わないといけないしな」

「ありがとう兄様ッ！」

感激のあまり妹に抱きつかれたたらを踏んでしまう。この数日、食事と言えば硬いパンが主食であったこともあり、その喜びは一入だった。

兄弟とは言え、丁度良い大きさの胸が抱きつかれた腕に当たり、その柔らかく暖かな感触になんとも言えない表情を男が浮かべる。

「んじゃ、帰りますか」

「はいっ……！」

歩き出した二人の表情は殺人を犯したというのに明るい。それもその筈。PKの数々の優遇、それは即ち、PK いや、殺人を推奨しているに他ならない。

このログアウト不能の世界こそ、現実とは違い、限りなく無法世界であった……

プロローグ（後書き）

後書き

最近めつきり行き詰ってしまい、とりあえず頭悪いの書こうと思いきり、即行で書きはじめた作品です。

見切り発車もいいところで、まさに片道切符。帰りは保証していません。

その場その場で展開を考えるとと思うので、矛盾とか多いかもしれませんが本作品に関してはご勘弁を。

ヒドイ場合は修正しますが、基本頭空っぽで書きたいから用意したものなので誤字脱字とか以外の、大幅な修正は期待できません。

それでは、そんな作者のご都合盛り沢山の作品ではありませんが、どうぞこれからよろしくお願いします。

感想及び評価、誤字脱字の報告があればニマニマと喜びますので気軽にどうぞ。

第二話

バーチャル技術と呼ばれるものが四年程前、世間に公表された。実際のところ後からの呼称であるが、根強い呼び名により固定された名だ。

少し前なら夢だと馬鹿にされた技術だったろうが、世の中天才はいるもので、数十年は叶わないと思われたバーチャル技術は見事完成された。

複雑怪奇な機構はブラックボックスな面も強いが、ありていと言えば脳がシナプス間を通じて行う電気信号。

その膨大な数に及ぶ信号パターン全てを解き明かした天才科学者がいた。

世界の科学技術はそれを境に飛躍的な向上を見せる。

医療であれば脳に近い部分に電子チップを埋め込み、脳から発される電気信号をチップとシナプスを強制的に介し、伝達齟齬のあった麻痺部分に通達。

結果、半身不随及び脳の伝達齟齬による麻痺は見事な治療を可能とした。

同じ原理で視力を取り戻すことは無論、生来目の見えない人も光を取り戻す。

反面、この技術は軍事転用されれば非常に危険な側面を持つ。

脳の電気信号が解明されたということは、逆に言えば相手の脳に電気信号を送り操れるということだ。

実際はそこまで複雑な機構を開発するのは容易くないが、不可能で言えば十分に可能である。

医療軍事と発達を見せた一方、娯楽への転換は当たり前だが最後となった。

世界中が、特に若者を中心として絶望の声があがったが、それは

バーチャル技術が世に出て四年後に起きる。

『世界初のVRMMORPG“Humans War”の世界共同開発が決定されました、詳しくは……』

予想より早い娯楽への転換。そこには政治的、軍事的、あるいはお上の命令。

様々な思惑の結果ヒューマンズウォーの開発が決まる。

そして僅か一年後、そのテスターとしておよそ百万人の応募枠が各国で発表された。

うち、日本ではおよそ二十万人の枠が設けられる。これは脳の電気信号解明の科学者、VRMMO用の筐体の開発の責任者が日本人によるためだ。

つまり、貢献度や国の国力などが応募枠に反映されているという、政治上の思惑である。

プロモーション用のムービーが、その数日後に日本公式サイトで発表。

初のVRMMOでありながら、そのグラフィック技術は既出のMMORPGをも容易く上回っている。

軍事用のまだ世間に降りてこない最先端の技術すら使われたそれは、一企業としての限界に囚われることがない。

莫大な資金による豊富な人材、技術は本来であれば数年は先のCG技術をも容易く成し遂げた。

総費用は明かされなかったが、噂では数百億とも、数千億とも言われている。

そうして築かれたゲーム人気が出ない筈もなく、一週間経たず約百万の応募者数が日本公式サイトには寄せられた。

この百万と言う数字虚偽ではなく、“テスター希望者は最寄の指定役場にて届けを ” と言う指示により、従来の捨てアドに

よる重複応募は不可能だ。

更には無料での健康診断が実地され、そこで渡される認可証精神、身体共に健康を示す証書をも必要とする徹底振り。

最終的に締め切り時には数百万名にも及ぶ募集者が現れ、その倍率は極めて厳しいものとなった。

当初は一千万を越すのではと言われたが、テストに国が指定した一ヶ月間の拘束期間の必要と言う記述のお陰でそれに至ることはなかった。

そんな異常な倍率を誇るテスター枠を“鬼無里兄弟”^{きなし}は二人揃って受かる……………

「えっと、ここが『Humans War』筐体センター〇四支部だな」

「随分と多いですね、人」

黒髪の少女が思わずと言った感じで呟く。専用のバスで数時間揺られて着いた場所は山奥であった。

自然豊かな場所には不似合いな巨大なセンター。そこには“HW筐体センター〇四支部”と大きく書かれた門。

その横には自衛官らしき人が検問官のように数名並び、ざっと見るだけで百近くは居るだろう人々から招待状を受け取り身元を確認している。

「大丈夫か？ 人が多いとこ苦手だろ？」

「いえ、大丈夫です兄様……………」

そう口元に笑みを浮かべるが、人形のように端正な、作り物を思わせる顔には僅かな怯えが見て取れた。

対人恐怖症とも、あるいはパニック症候群とも呼べるし、心的障^{トラウマ}害と呼んでもいいかもしれない。

「取り合えず愛姫^{あいひめ}はここで待っていてくれ、俺が招待状もって並ぶから通る時に呼ぶよ」

「ありがとうございます、兄様」

「気にするなつて、血を分けた妹なんだぜ？ まして兄は妹を守る為にいるんだからな」

そう言つて自身より二十センチ以上小さな妹の頭をぐしゃぐしゃと撫で回す。

キューティクルが美しいそれは絹より手触りがよく、ともすればずっと撫でていても飽きないほどだ。

細い髪が宙を舞い、その度にシャンプーとそれ以外のあまやかな香りが鼻を擽る。

「ちよ、わっ！？ に、兄様、か…髪がくしゃくしゃになってしま
います！…！」

「よしっ、少しは緊張がほぐれたな。んじゃ行ってくるわ」

歩き出した兄の後方、言われて身体の強張りが解けていることに気づく。

何時だつて少女の兄はこうして助けてくれる。世間的に見れば欠陥を抱えた兄だが、少女にとっては何時だつて“英雄^{ヒーロー}”なのだ。

「早く戻つて来て下さいね、にいさまー！…！」

嬉しくなり、思わず子供のように両手を伸ばし振ってしまふ。振り返りはしなかったが、後ろ手に手を振り替えしてもらい、更に心が暖まっていく。

その姿が他のテスターに紛れて見えなくなるまで笑顔で手を振り、ふと気づけば随分と周囲から注目を集めていることに気づく。

持ち前の対人恐怖症にも似た症状がぶり返し、固まることはなかったが肩を少しだけ竦ませてしまふ。

それでも出来るだけ俯かずに前をむく。これも兄がわざと作ってくれた“機会”であると知っているからだ。

「はい、お待たせしました。招待状はお持ちになりましたか？」

「これですよね？」

並び始めて十五分近く、ようやく自衛官の場所まで着き、ポケットに仕舞っていた“二枚”の招待状を取り出す。

「鬼無里鬼瑠様と……こちらは？」

「すみません、妹の分なんですけど、雑多な場所が好きじゃなくて。今呼んできますね」

「ご兄弟でテスターに当選ですか、それは運がいい。ではまだ人は居ますんで、早めにお願ひします」

「了解です。おーい！ あいひー！ー！」

声を掛けるが返事がない。はて？ と、自衛官に一声掛けてから愛姫の下に向かう。

時間が経ったにしては門前の人だかりは衰えない。みれば新たなバスが到着していた。

更に視線を移せば妹、愛姫が一人の男性に絡まれてるが見える。逸る内心を押さえつけ、足早に近づけば会話が聞こえてきた。

「ねえー、いいじゃんかよお。俺と一緒に並ぼうぜ？」

「は、離して、ください」

「にしてもほつそいねえー、食べてる？ でもオレの好みー。この建物さー、レストランあるんだって、一緒に食べようぜ。金ならオレ払うって、こう見えて結構金持ち？ みたいな」

「に、にいさ……」

ブチぎれるより早く、愛姫が助けを求める更に早く金髪に染め痛んだ髪、パンクなファッションにアクセサリーをじゃらじゃらと付けた男の間に割り込む。

握られた手を力尽くで振りほどき、その際軽く捻りを加えてやる。

「ツてえ！？ おい、オマエ邪魔すんなよ！ アツ！？」

「失せる肩が」

唾を吐き捨てるように嫌悪を隠しもせず口にする。

「上等だガキイツ！！ その小綺麗な顔に芸術を施してやんよツ！！」

何を言われたのか理解した瞬間、金髪の男の眉根が釣り上がりその手が振り上げられる。

あまりに短気で阿呆。そう内心で呟きほんの一瞬目蓋を瞑り精神を集中させていく。

時間にして刹那の瞬間、“世界は凍結した”。真実は異であり、実際のところは世界が凍結するほどの“思考加速”。

一種の天才的能力であり、その代償として欠陥をもその身には与

えられたが、その力は絶大だ。

木偶の刹那は鬼瑠にとつては無限の如くであり、加速され、平行化された思考は膨大な情報から最適の解を導き出す。

そこから思考速度を落としていくと、金髪の腕がゆっくりと動き出す。

あまりに遅いその一撃に合わせ鬼瑠自身も動き出すが、その動きも亀の如く。

確かにその力は世界を凍結させるほどの思考速度を生み出すが、肉体がそれに付随する訳ではない。

まあ、それでもと。単純な暴力勘違い野郎を黙らすには十分すぎる力であった。

振られる腕に合わせ更に同方向へと手を沿え押し出してやる。その瞬間思考加速を解いた。

「うっ、うわあッ!? へぶしっ!?!」

見事バランスを崩し転んだ男の腹に容赦なくつま先でめり込ませる。

最低限の手加減を加えた一撃は内臓破壊すら免れたが、凄まじい苦痛を男に与えた。

「自衛官が待っている、行こう」

罪悪感の欠片も見せず言い放つ。増えた人ごみにより、自衛官からは見えないこともあつての行動だった。

「はいっ兄様!」

そしてそれを当然の如く受け入れる愛姫。モラルの欠如。それが

兄の負った欠陥であり、愛姫はそれを気にするどころか受け入れていた……

第二話（後書き）

後書き

欠陥品の兄と妹。メインキャラクターです。

頭悪い作品の筈が、気づくとなぜか回りくどい設定を盛り込んでい
る……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3416ba/>

主人公はロクデナシ

2012年1月9日06時45分発行